魔法学院物語(仮)

霊琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法学院物語（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１４３８ＢＡ

【作者名】
霊琉

【あらすじ】
クロリア王国首都クロリア。そこには世界最大の魔法学院マジックゲートがある。生徒達はよりランクが高い魔術師になろうと日々励んでいる。
これから始まるのは様々な者達がめぐり逢い、織り成す物語。

＊魔法学院生徒物語改訂版

プロローグ

――ドクン……ドクン。

光など微塵も入り込まない真っ暗闇。心臓の音が響くだけ。
何時間、何日……いや、何年間も経っているかもしれない。
視るという行動はとうの昔に忘れた。聴覚は働いてはいるが心臓の音しか聞こえない。
嗅覚を働かせても腐ったような臭いしかしない。声をだそうとしても口が何かに塞がれてくぐもったうなり声しかあげられない。

ナゼ、オレハココニイル？

イマイマシイニンゲンドモメ……カッテニウミダシ、テニオエナクナルトスグニトジコメヤガッタ。

タシカニ、オレハバケモノ。ダガ、マエハニンゲンダッタ。イミノワカラナイジッケンデ、ニンゲンデハナクナッテシマッタ。
アレカラ、ドレダケタッタ？

マダ、ジッケンハオコナワレテイルノカ？

シリタイコトハヤマホドアル。

――カツッ……。

何処からか床に何かが当たる音が聞こえる。

――カツッ、カツッ。

少しずつ音が近づいてくる。……これは足音だ。
ひさしぶりに聞く、自分以外がたてる音。
その音は突如として聞こえなくなる。
――キィィ……。
何かが床とこすりつけられる音とともに、真っ暗闇の景色が真っ白に染められた。
目を刺すような痛みにたまらず目をつむる。……視覚は働いた。黒以外の色を見た。
……マブシイ。
口に手が添えられ、次の瞬間口を塞いでいたモノが外される。
「ウゥッ……ダ、レ、ダ……」
ひさしぶりに声をだした。長い間話さなかったことで、あまり良い声とは言えない。目も徐々に光になれ、景色が映し出される。
「私は君を助けに来た。……君を苦しめたヤツらに天罰を与えよう」
目に映ったのは光を背に、語りかけてくる少年。差し伸べられている手と少年を交互にみる。
テンバツ？　バカラシイ。ダガ、オレヲタスケテクレタコトニハカンシャシナイトナ。
「……キューセイシュ、カ？」

少年は腕を引っ込め、考えるように手を顎にあてる。

「救世主？　……悪くはない。そうだな……それがいい」

少年は納得するように何度も頷いた。再び手を差し伸べ言った。

「私はメシア……救世主だ。私とともに世界を変えよう」

……ナンダ、タダノカミサマキドリノニンゲンジャナイカ。

ダガ、コイツトイルトタイクツシナクテスムカモシレナイ。

……スコシバカリ、オロカナニンゲンノタワゴトヲキイテヤロウ。

簡略設定

この世界には魔法が存在する。魔法を使うには魔力が必要だ。魔力は生まれつき持つものでほとんどの人が持っている。

魔力には属性があり、使用者の属性に合った魔法の威力が高くなる。

強い魔法であればあるほどより多くの魔力を消費する。

魔法は様々な種類があるが大きく分けて４つの種類がある。

『白魔術』……防御や治療など主に使用者を補助する魔法が多い。

『黒魔術』……相手を攻撃する魔法のほとんどがコレに分類される。そのなかには使用者の生命を削る危険なモノも存在する。

『錬金術』……物質を別の物質に変えたり、物質を作り出す魔法というより技術。

『召喚術』……遠く離れた魔力を持つ生物を呼び出す魔法がコレにあたる。熟練した者は異世界の生物を呼び出せるという。

他にも様々な魔法が存在し、違う種類の魔法を組み合わせ、新たな魔法を作ることも出来る。

この世界では魔法学院と呼ばれる学校があり、初等部（６年間）、中等部（３年間）、高等部（３年間）、上等部（４年間）に分けられる。

魔法学院は全寮制の場合が多く、基本的に２人部屋しかない。

魔法学院の敷地内には校舎に加え、食堂や図書館、寮がある。

食堂は1階が初等部、2階が中等部用、3階が高等部、4階が上等部用とわかれている。

図書館は3階建てで1階は普通の本、2階は魔法に関する本、3階は王国や世界の歴史を記した本や資料などがある。

魔法学院の生徒には成績に応じてランクが決められる。

AからFの基本ランクに加え、優秀な者……いわゆるエリートランクのS、落ちこぼれのGがある。

ランク分け試験は年に3回、長期休業前に行われる。

ランクは学院内だけではなく世界中で共通している。やはりランクが高いほど社会的地位も上がる。　ランクは魔力の大きさと魔法の技術、知識、体力などにより決められる。高ランクが待遇がよいにもかかわらず手を抜いて低ランクに見せかける人もいる。

この世界に住んでいる人間を含む全ての生物に魔力がある。ごくまれに魔力が極端に少ない生物も存在する。

少ないとは言っても全くないということはない。魔力が少なくても訓練などで大きくすることができる。

『ランクの基準』

魔法学院初等部……E

魔法学院中等部……D

魔法学院高等部……C

魔法学院上等部……B

ランクの基準はあくまでも各課程終了時にこのランクにはなって欲しいというものなのだが、ほとんどの生徒は1ランク下だ。

魔法学院は高等部まで通うことが義務づけられている。だが、やむを得ない事情がある場合は特例として高等部に名前だけ入っている状態で登校しないということもある。

この世界には魔術協会と呼ばれる機関があり、簡単に言うと魔法を扱う者の管理をする。　魔術協会は魔法学院上等部を卒業した者しか入会出来ない。

よって魔術協会はエリート集団だという認識が世界中の人にある。

魔術協会は世界中にあり、その本部はクロリア王国にある。

さらに魔術協会とは別に魔術騎士団があり、それは学歴を問わず、優秀と認められれば入ることが出来るが、最低条件としてAランクだ。

クロリア王国の最大イベントとして4年に1度世界中の魔術師が集まり世界一の魔術師を決める大会がある。参加資格はAランク以上であること。

優勝者には世界最大の図書館……『世界書庫』に入ることが許される。

『世界書庫』には世界中のすべての書物がある。中には禁断の魔法とされる魔法の使い方が書かれている本も存在する。

『世界書庫』がどこにあるのか知るものはクロリア王国国王と魔術協会会長、大会優勝者のみである。

第1話（前書き）

ところどころ改変しています。

第1話

――クロリア王国魔法学院マジックゲート中等部――

1年2組の教室では、女性教師が教鞭をとっていた。どうやらこのクラスには真面目に授業を受けている生徒が大半をしめるようだ。

「私達魔術師にはランクがつけられています。ミスター・リカッド、ランクについて簡単に答えなさい」

呼ばれたレイル・リカッドは面倒臭そうに立ち上がる。

「はい。ランクとは魔術師の実力を示すためのものです。ランクが高いほど地位も高いです」

「まあ良いでしょう。座りなさい」

「はい」

レイルが座るのを確認すると教師は周りを見渡す。

「ランクはAからFがありAが最も高いランクです。ですが、例外も存在します。ミスター・クルー答えなさい」

「はい。Aよりも高いランクとしてSランクがあります。そして……」

カシア・クルーは1人の少年を見た後、再び前を向いて答える。

「Fランクにも満たないランク。落ちこぼれのGランクがあります」

「そうです、その通り！　初等部の者でさえEランクが多いのにシルフィード・マグナス、アナタは落ちこぼれなんですよ！」

シルフィードは名前を呼ばれたのにもかかわらず机に突っ伏している。

「マグナス君は寝てまーす」

「またですか！　中等部に入って2ヶ月、寝てばかりじゃないですか！」

騒ぐ教師の声に反応してシルフィードは顔を上げる。

「やっと起きましたか……だいたいアナタは」

「……うるさいババァ」

その瞬間、多くの生徒は教室の温度が下がった気がした。シルフィードは吐き捨てるように言って再び机に突っ伏した。

「な……ババァですって！　教師に向かってババァと……寝るんじゃない！」

教師はシルフィードの頭をつかみ、無理やり顔をあげさせた。シルフィードは仕方ないな、といったような顔をしている。

「シルフィード・マグナス、放課後職員室に来なさい。これは命令です。拒否権はありません」

「……わかりました」

「よろしい」　わかりましたと答えたが、シルフィードは職員室に行く気は全くない。

放課後になったらすぐに寮に戻るつもりだ。

――そして、放課後――

シルフィードはそそくさと学院を抜け出して、寮の自分の部屋に行こうとしていた。だが、教室の入り口に邪魔者がいる。

「……通せよ」

「ダメだよ。ちゃんと職員室に行かなきゃ」

教室の入り口に立つ女生徒アイリ・シグニットをシルフィードは睨みつけている。

アイリは優等生だ。真面目で成績も良く、中等部1年生にして既にCランクだ。教師達の中にはアイリのことを気に入っている者も多い。

「教師の犬が……。そこまでして教師に気にいられたいのか」

「そんなことはないよ」

「ならそこを退け」

「マグナス君が職員室にいかないと授業中はまた説教……マグナス君のせいで授業が進まないんだ」

「授業中邪魔にならないように寝ているだけだ。それなのに教師がくってかかる……それだけだ」

「それだから落ちこぼれなんて言われるんだ！　初等部の頃から授業中は寝てばかりじゃないか」

「いいから退けよ……ちなみに学院内での魔法使用は授業中以外禁止されている。純粋な力だけだと強いのは俺だ」

魔法学院は魔法を学ぶ所ではあるが使う所ではない。実習で魔法の練習をする以外は許可がない限り使ってはならない。

使った場合は生徒指導の対象となり、それ相応の処罰がされる。

「お、脅してるつもり？」

強がってはいるがアイリは痛いのは嫌いで、内心ビクビクしてい

る。
シルフィードは中等部1年生の中でも力は強い方で、素手同士なら上級生にも負けないだろう。
ちなみに、体育の成績はトップだ。
「脅してるわけではない。だが……早く退かないと本気で殴る」
シルフィードは手に力を入れて、拳を上に振り上げる。
「ヒッ……」
殴られる。そう思ったアイリは震えながらその場から退いた。シルフィードは所詮女か、とアイリを見下すような目で見る。
「それでいいんだ」
シルフィードは廊下に出て寮に向かおうとした。だが、シルフィードが廊下に出て歩きだそうとしたが足を動かすことができなかった。シルフィードが足下をみてみると、光でできている紐で足が縛られていた。
「……アイリ、校則違反だ。優等生のお前ならわかるよな、許可なしに魔法を使ってはならないことぐらい」
「それを言うなら……」
「俺は魔法学院に入ってから一度も校則違反はしてない」
「授業中寝ているし、教師の言うことも聴かないじゃない」
「授業中に寝てはいけないという校則はない。教師の話をきけという校則もない」
「で、でも……それは当たり前のことだから」「当たり前？　なら校則を守ることは当たり前じゃないのか」

「……うるさい。いいから職員室に行きなさい！」
「……今解放すれば見なかったことにしておく。幸いにも他の生徒は寮に帰ったみたいだしな」

シルフィードの言葉にアイリは迷った。きっとこのまま職員室に行かせれば魔法を使ったことをバラされるだろう。
校則違反の処罰は様々だが、どんな罰でもランクに影響するだろう。
酷ければ自分もGランクに落とされるかもしれない。

「……本当に、誰にも言わない？」

しばらく互いに黙っていたのだが、さきにアイリが口を開いた。
シルフィードは事を大きくする気はまったくないというか、早く部屋に帰りたい。
「もちろんだ。今すぐ……」
「何をやっているのですか！」
「……チッ。来るのが早いんだよババァ」

タイミングが悪い、とシルフィードは思う。もう少し遅ければ魔法は解かれていた。それに自分もこの場に居なかった。
アイリはというと青ざめた顔で教師を見ている。

「ミス・シグニット、これは一体どういうことです」
「も、もうしわけ……」
「すべて俺が悪いんです。職員室に行かず寮に帰ろうとした俺を止めただけです」
「……そうであろうとも校則違反を犯した者には処罰をしなければなりません。2人ともついてきなさい」

黙って教師の後をついて行く2人。アイリはたまにシルフィードを見ながら歩いているが、シルフィードはただ前を向いたまま歩いていた。

「ここで待っていなさい」

そういって教師は学院長室に入っていく。

「ど、どうしよう。学院長室だよ」

もちろん学院長はこの学院でもっとも偉い。さらにこの学院の学院長は中等部時代で既にSランクの魔術師として学生でありながら魔術協会の手伝いをしてきた。

そして、王国内だけではなく世界中でも有名で、『伝説の魔術師』の1人として今でも活躍中である。

「もとはといえばお前が魔法を使うからだろ。……ふざけるなよ」

「……ごめんなさい」

2人は互いに顔を合わせようとせず、アイリはうつむいて、ただ時間がだけが過ぎていく。アイリはチラチラとシルフィードを見ているが、目が合うとにらまれるのでビクビクしている。

「入りなさい」

学院長室から男性の声がした。シルフィードはアイリをチラッと見た後、学院長室の扉を開けた。

「シルフィード・マグナス、失礼します」

「あ、アイリ・シグニット、失礼します」

２人が中に入ると、２人をつれてきた教師と白髪混じりの男性……学院長がいた。

「話は聞いた。魔法を使ったようだね」

「もうしわけございません！」

アイリは深々と頭を下げるが、シルフィードはじっと学院長を睨んでいる。

「君は授業態度が悪く、教師の言うことも聴かない……何故かな」

「校則にはありませんし、学院で習うことがすべてだと思っていません」

「それでも学院の生徒として見せかけでも真面目にしていると助かるがね」

「……あいにく、俺は不器用ですから」

「まあ自分に正直なのは良いことだ。さて、今回の処罰のことなのだが……」

「退学でも良いですよ」

「高等部までは義務だから退学はないよ。酷くても留年どまり」

留年と聞いてアイリの顔が青ざめていく。留年するということはランクにもかなり響く。

「君達２人のどちらかが１ヶ月後にあるランク分け試験で２ランク上がれば処罰を取り消そう」

「……俺は退学が良いです」

「ち、ちょっと待ってください！　２ランクって無理ですよ」「君には無理だろうね。でもＧランクだったら簡単じゃないかい」

「必死になって頑張りなさい」

学院長室を出てシルフィードはアイリを置いてサッサと歩いている。

「ち、ちょっと待って！」
「……何？」
「ランク分け試験どうするの？」
「興味ない」
「き、興味ないって……留年になったらどうするの？」
「別にどうもしない」
「な、何で……」

アイリは呆然とした様子でシルフィードを見ている。

「……で、もう行って良いか？」
「ま、待って。お願い、今度のランク分け試験で2ランクだけで良いから」
「お前がAランクになればいいだけだろ」
「無理だよ！　今だって必死に勉強してCランクなのに」
「とにかく、俺はどうでもいいんだ」
「そ、そんな」
「それに、お前が原因だろ？」
「……ごめんなさい」
「ふん」
「あっ……」

シルフィードはアイリに背を向け歩き出した。

第2話（前書き）

駄文注意です。

第2話

ある日の昼休みのこと。シルフィードが食堂で昼食をとっていると、正面に誰かが座った。
シルフィードは食事の手をいったん止め顔を上げ正面の人物を見た瞬間顔をしかめ、再び食事をはじめた。

「……ね、ねえ」
「何度言われても俺の気持ちは変わらない」

魔法学院マジックゲート敷地内にある食堂。中等部用の2階、入り口から1番奥のテーブルにシルフィードとアイリとアイリの友達がいる。

「ねえ、アイリ……こんな奴に頼んでも無駄だよ」
「で、でも私は2ランクも上げられないし……」
「大丈夫。処罰が留年だとは限らないよ」
「そうかもしれないけど……」「なあ、そろそろ良いか？　食べ終わったから寮に帰りたいんだが」
「え！　午後からの授業はどうするの？」
「……アイリ、今日の授業は午前中だけだよ」
「え……そうだっけ」

今日は職員会議で午前中しか授業がない。職員会議は初等部から上等部までの教師が参加するためかなり時間がかかるらしい。

「さすが優等生……授業がなくても授業するんだな」
「うぅ……」

アイリは恥ずかしそうに顔を赤く染めている。
「マグナスは今から暇なの？」
アイリの友達セレーナ・クラントはシルフィードにたずねた。
「何でお前に言わないといけない？」
「暇なら……今から遊びに行かないかしら？」
「……何のために？」
「何のためって決まってるじゃない。親睦会よ」
「……くだらない」
「くだらないって何よ。私とマグナスはクラス違うからね。お互いのことまったくしらないから」
「何で知る必要があるんだ？　それに、仲良くなるわけない。よって、俺がランク分け試験で2ランク上がることはない」
「……もういい、2人で行くから」
「え、え？」
「行くよ、アイリ！」
「う、うん」
「……ふん」
アイリとセレーナは学院敷地外に遊びに行く。
この学院だけではなくほとんどの場合が大きな街の中に建っている。生徒は平日は校舎と寮を行き来するだけだが休日になると街に出て買い物をしたりする。
買い物をするには無論お金が必要だが、物などの代金もランクに

よって異なる。ランクが高いほど安く買える。Sランクになるとほとんどの店で無料になる。
お金についてだが学生はバイトで稼ぐ以外に王国から援助金をもらっている。毎月貰えるがやはりランクによって異なる。バイトの給料なども同じく異なる。

ちなみ学院内ではお金は必要ない。学費もないので誰でも入学出来る。

「ムカつく！　やっぱりアイツムカつく！」
「えっ……と、どうしたの？」
「どうしたもこうしたもないわよ！　アイツ、Gランクのくせに生意気」
「そんなこと言ったらダメだよ」
「何で？　処罰のことだって人事みたいに……ホントどうするの！」
「……どうしよう」

アイリはその場で止まりうつむく。その顔は今にも泣き出しそうだった。

「……アイリ、今日は街で遊んで嫌なことは忘れよう！」
「……セレーナ」
「私Eランクだけどアイリがいたら安く買えるし♪」
「……私利用されてる」

――クロリア王国首都クロリア――

「やっぱり街は良いね」
「そうかな？　私は静かなところがいいな」

アイリは小さな村で生まれ、初等部に入る時にこの街にやってきた。
はじめの頃は怖かったのだがいつの間にか慣れてしまい、今では休日になると友達とこうして街に遊びに来ている。

「……タシカニコノマチハサワガシイネ」
「え？」　アイリが振り向くと、緑髪の少年がいた。その目は真っ赤に輝いている。

「ハジメマシテ、ルー、トイイマス」

緑髪の少年ルーは丁寧なお辞儀をする。

「あ、初めまして。アイリ・シグニットです」
「私はセレーナ・クラントです」

2人もルーに自己紹介をした。

「あの……外人さんですか？」
「ン……ワタシ『リトリッジ王国』カラキタンダ」

リトリッジ王国は小さな島国だ。魔法学院もあるが小さい。だが、遺跡が多く、たくさんの学者達が訪れる。

「へえ、リトリッジ王国ですか」
「……リトリッジ王国は歴史的な建造物で有名な国だな」
「フレイル先輩！」

ディザ・フレイル。魔法学院マジックゲート中等部3年でBランク。顔立ちが整っていて優秀であり特に女子から人気がある。

「ヤア、ディザ」
「お2人は知り合いなんですか？」
「ああ、友達だよ……今日はこの街を案内するんだ。それじゃ、また」

ディザとルーは手を振りながら街の人ごみの中に消えていった。

「……わ、私、フレイル先輩と話しちゃった」
「そうだね。ビックリした」

同じ中等部とはいえ、なかなか会うことが出来ない憧れの先輩と話したことでセレーナは興奮していた。その後、2人はしばらく街をうろうろしていた。

「あ、そうだ。新しく出来たカフェに行かない？　そこのケーキが美味しいらしいんだ」
「へぇ、誰情報？」
「プルム情報だよ」
「なら本当だね」
「あれ？　何気に信頼されてない」

――クロリア王国図書館――

「……ヤハリソノセカイタイカイトヤラニユウショウシナケレバセカイショコニハイケナイノカイ？」「ああ、大会優勝者にしか『世界書庫』の場所も教えられないからな」

2人の少年はクロリア王国図書館で資料を探していた。禁断の魔

法に関する資料は普通の図書館に存在しないことは2人にはわかっていたがもしかしたら……という考えが捨てきれなかった。
結局何も見つからず、2人は図書館の隅で話していた。

「……イッソノコトコクオウヲオドシタラドウダ？」
「そんなことをしたら私達は犯罪者だ」
「オソカレハヤカレクニ……セカイヲテキニマワスンダカラベツニイイダロウ」
「ダメだ」
「ハァ……セカイタイカイガアルノハライネンダロ。ソレマデマツノカ？」
「……実験をしようと思う」
「ナンノジッケンダ？」　ディザは質問には答えず、図書館の出口へと向かう。図書館を出てしばらく歩いた。ふと立ち止まったディザは振り向いてルーを見る。

「……まずは仲間を探さないとな」
「ワタシタチダケデハダメナノカ？」
「駒があれば戦略も広がるからな」
「ダガ、ソレナリニユウシュウナモノヲサガサナイトイケナイ」
「大丈夫だ、あてはある」

――魔法学院マジックゲート――

夕食の時間となりほとんどの生徒が食堂で食事をとっている。

「……で、頼みって何ですか？　フレイル先輩」

ディザは1人の女子と相席していた。その女子の顔は若干赤い。

「つきあって欲しいんだ」
「……え？」
「君じゃないといけないんだ。……頼む」
「わ、私なんかで良ければ……喜んで」
「ありがとう。それじゃ、後で僕の部屋に来て欲しい」
「わ、わかりました」

ディザは立ち上がり、食堂をあとにした。外は既に薄暗くなり日は沈んでいた。

「オドロイタナ……コクハクカ？　ココロニモナイコトヲペラペラト」
「いや、あの言葉は本気だよ。実験の適応者は少ないから……」

この日、1人の女生徒が学院から姿を消した。

第3話（前書き）

暇な時に投稿すると思います。

第3話

気がつくと闇の中だった。どこを見ても真っ黒な景色が続くだけ。
メイス・アグライアは魔法学院マジックゲート中等部3年だ。メイスは先ほどディザに告白され、彼の部屋に行ったはずだった。

部屋に入った瞬間意識を失い、気づいたらここにいた。
どうやら景色が真っ黒なのは目隠しをされているからみたいだ。
体を動かそうとしても動かないのは体を縛られているからだ。

……でもどうして？

メイスは考えるがわからない。ディザが何かをしたかもしれないということは考えられなかった。でもディザの部屋で何かがあった。
これはたしかだった。

「だ、誰か！」

メイスは叫ぶが、メイスの声が響くだけだった。近くには誰もいないようだ。

「誰か……助けてよ……」

――魔法学院マジックゲート――

「行方不明？」
「そう。アグライア先輩が昨日の夜から行方不明」

食堂で朝食をとりながらアイリとセレーナは話していた。行方不

明になった先輩はセレーナが初等部の頃からお世話になっている優しい人だった。
寮は初等部から高等部まで一緒だ。上等部の校舎は離れたところにあり寮も校舎の近くにある。

「昨日の夜からだったら誰かの部屋に泊まってるんじゃないの？」
「……もしかして男だったり」
「お、男？　ま、まだ中等部だよ」
「だからこそだよ。早い内から手を着けて他の奴らには手出しされないように……」
「……ところで、なぜ貴様らは相席なんだ？」

そう、アイリとセレーナは今日もシルフィードと相席だ。

「ご、ごめん。私は止めたんだけどセレーナが……」
「気が変わったかなーとか思って……」
「それはない。……さて」
「どこに行くの？　暇なら今日は休日だし……」
「あいにく、俺には用事がある」
「どんな？」
「わざわざ貴様に教える義理はない」
「少しくらい良いじゃない！　行くよ」

セレーナはシルフィードの腕を掴み、立ち上がる。

「おい、はなせ！」
「ダメ……アイリはそっち持って」
「わ、わかった」
アイリも立ち上がりシルフィードの空いている腕を掴む。

「おい！」
「それじゃ、出発！」

シルフィードは2人に引きずられて食堂をでた。アイリとセレーナは学院内にある図書館までシルフィードをつれてきた。

「……いい加減はなせ！」
「ご、ごめん」

2人はシルフィードから手を離す。シルフィードは舌打ちをして図書館から出て行こうとする。

「待って！　頼みがあるの」
「……断る」
「まだ何も言ってない！」
「言わなくてもだいたいわかる……ランク分け試験のことだろ」

図星だったのかセレーナは沈黙する。シルフィードはため息をついたあと図書館から出ようと再び歩きだす。

「質問していい？」
「……何だ？」
「マグナス君は試験で本気を出した結果Gランクなの？」
「試験で手を抜いてランクを低く見せるメリットはないだろ」
「そう。……もし、手を抜いているのなら、1度だけで良いから本気だしてよ」
「……ふん」

シルフィードが図書館から出て行くのをアイリは黙ってみていた。

「……アイリ、できる限りの協力はするね」
「セレーナ……ありがとう」

――魔法学院マジックゲート男子寮――

「ふん……くっだらねぇ」

図書館を出たあとシルフィードは先ほどの会話を思い出し、鼻で笑った。そして自分の部屋に戻ろうと寮に向かう。

「よう、落ちこぼれ。朝食のあと姿が見えなかったがどこにいたんだ」
「……図書館まで連れ去られた」
「はは、とんだ災難だな」

寮の入り口でシルフィードに声をかけてきたのは中等部1年のフィル・フォモール。Dランクでシルフィードと同じ部屋だ。

「で、フィルはここで何してる？」
「お前を待ってたんだ。……お前以外全員そろってる」
「……そうだったな。今日は俺の部屋で集会か」

悪かったな、と言ってシルフィードは寮の中へ入っていく。フィルも追いかけるようについていく。

男子寮は初等部から高等部までが一緒なのでかなり広い。しかし、一緒なのは入り口だけで、そこから3方向に道が分かれている。
初等部は入り口からみて左、中等部は右、高等部は正面の道を進めば自分たちの寮につく。3階立てで一応どの階でも別の学年に行き来ができるようにつながっている。

シルフィードは入り口から右、中等部寮に進み数部屋通り過ぎたあと足を止め部屋に入った。

「ずいぶん遅かったな」

「ああ、すまないな」

ここはシルフィードの部屋だが今この部屋に居るのはシルフィードを含め6人だ。

「みんな揃ったから始めるか……」

ボサボサの黒髪長髪の眼鏡をかけたDランクのリーチ・ランダインは話を切りだす。

「俺達は日頃の授業態度や生活態度が悪い。それは学院内でも有名だ」

「今更わかりきったことを……」

呆れるように呟いたのはEランクのテスラ・ヴァインス。

「これは先輩から聞いた話だが、どうやら教師達は俺達に何かしらの処罰をあたえるつもりらしい」

「処罰だあ？　ンなの無視すればいい」

Dランクのキース・ユナイゼルは校内で暴力をふるうことが多く生徒達から怖れられている。

「無視したら処罰が重くなる。よく考えろ」

キースを注意するリサーバ・ランダインはリーチの双子の弟でDランクだ。

「処罰か……俺、巻き添えで処罰くらうかもしれない」
「シル、本当か？」
「ああ、今度のランク分け試験で2ランク以上上がらなかったら処罰だと」
「ああ、それってお前と同じクラスの女子も言われたんだろ？」
「さすがフィル、情報が早い」

フィルは噂好きな生徒で話を盗み聞きしたり聞き出すのが得意。真偽は問わず生徒の様々な噂を知っている。また、偽りの噂を瞬く間に広げることも可能だ。

シルフィードは学院長室で言われた処罰免除条件を皆に話した。

「お前なら安心だな……でもお前は処罰を受けるつもりなんだな」
「ランクを上げるつもりはサラサラない」
「……どうすんだよ」

キースがニヤニヤしながらシルフィードに聞く。他の4人も気になるのかシルフィードを見る。

「ランク分け試験はサボる。処罰の件で呼び出されたら堂々と処罰を受けるさ」
「たが運命共同体の女子生徒はどうなる？　見捨てるのか？」
「そもそもアイツのせいだろ。魔法を使ったんだ。処罰を受けるべきだろ」
「……アイリ・シグニットだろ？　そういえばアイツ結構人気あるぜ」
「人気？」
「ああ、可愛くて頭もいい。処罰免除になればアイツのことだし何

かしらのお礼はするんじゃないか」
「……お礼ね」
「ああ、あんなことやこんなことしてもらえるかもな
「ふ、興味ない」
「……だから落ちこぼれって言われるんだ」
「あ〝？　何の関係があるんだ」
「せめて……異性にたいしては積極的になれよ」
「面倒くさいじゃないか」
「はあ……俺だったら2ランク上がれたらヤらせろとか言うぜ」
「俺はお前じゃないし、まだ中等部だろ」
「はは、お子ちゃまだね」
「……喧嘩売ってるだろ」

シルフィードとキースの言い争いに皆は苦笑いをする。

「でも処罰って何だろうな。免除条件もあるくらいだからかなり重かったりして」
「重いと言っても最悪留年ぐらいだろ」
「留年も結構重いだろ……噂だと死んだほうがマシだというような処罰があるらしい」
「へえ……女子生徒には辛いかもな」
「留年だと聞いて青ざめるほどだったからな」
「……それ、普通の反応だ」
「はは、留年程度で青ざめるなんてガキだな」
「……留年って軽いのかよ」

リサーバとシルフィードの会話にフィルは頭を抱えている。それを見たリーチはため息をつく。そして口を開いた。
「シル、正直言ってお前は俺から見ても格好いい」
「……いきなりなんだ？　気持ち悪いぞ、お前」

リーチの言葉にシルフィードは冷たく対応する。反応だけではなく視線も冷たい。だが、リーチは気にせず続ける。

「それなのにお前のことを好きな女子を聞いたことがない……噂好きのフィルでさえも」

「ああ、そうだな」

「俺はその原因を考えて見た……それはそのランクだ」

一旦話を区切りリーチはシルフィードの目を見る。

「ランク分け試験で処罰免除されたらシグニットからの評価も上がる。周りの見る目も変わる。良い方向にね」

「興味はない。特に色恋ごとにはね」

「お子ちゃまだな」

「殺すぞキース」

「お、殺せるのかよ？」

シルフィードはキースを睨みつけ、キースはニヤリとシルフィードを見る。

「まだ、話は終わってない」

「だから、俺は……」

「ランクが高くなればいろいろ言われないだろ」

「……そうだな」

「まあ、Sランクになったらかなり目立つがGランクもそれなりに目立ってるからな」

「……ありふれた平均ランクになれば」

「今よりはましになる」

「ついでにアイリを……」

「しつこいぞテメェ」
「話は最後まで聞け……アイリを奴隷にすれば良いじゃないか」
「……お前、そう言う趣味が」
「あるよ！　……悪いかよ」
「……ならお前の奴隷居るのか？」
「ふん、軽く脅せばすぐ奴隷になる」
キースは学院内で悪い噂しか流れないというほど最悪な生徒だ。基本的に暴力を振るわないことはなく、女子にも暴力を振るう。性的暴行は起こしてないがかなり危なかったりする。

「……奴隷ね」
「ああ。奴隷つうかパシリだな」
「奴隷にはしない。そこまで落ちぶれてはいない」
「……そうかい」

さてと、と言ってシルフィードは立ち上がり部屋を出ようとする。

「ん？　どこへ行くんだ」
「ふん、ちょっとな」
「お、姫を助けにいくのか騎士さんよ」
「1回死ね」

シルフィードが部屋を出るのをみて、皆はヤレヤレという顔をする。

「正直になれば良いのになアイツも」
「俺、シルとアイリがくっつく方に賭ける」
「俺も」
「案外、ラブラブになりそうだよな」
「なら全員くっつく方か？　賭けにならないじゃないかよ」

「ま、良いじゃないか。もしかしたら早いうちにヤっちゃうかも」
「おー。シルって意外とムッツリスケベタイプじゃないかな」
「ムッツリじゃなくてガッツリだったりして」
「……お前ら、シルに殺されるぞ」

フィルは誰にも聞こえないように呟いた。

――学院敷地内図書館――

「はあ……無理だ。2ランクってAランクだよね。Bランクにも届きそうにないよ」「諦めたらダメだって」
「いや……頑張るだけ無駄だ」

アイリとセレーナが声がした方を向くとシルフィードがいた。

「どういうこと！」
「上等部でもAランクはほとんどいない……客観的事実を言っただけだ」
「何でそういうこと言うのかな！　もともとアンタが……アイリ」

セレーナの言葉を遮るようにアイリはセレーナの手を握る。

「もう……良いよ。処罰がそんなに重いとは限らないから」

アイリはそう言ったが今にも泣き出しそうな顔をしていた。それを見たシルフィードはため息をつきながら頭をかいた。

「……そういえばマグナス君はここで何をしてるの？」
「貴様に言う筋合いはない」
「……ムカつく、落ちこぼれのくせに」

「奇遇だな、俺もムカついている」
「ふ、2人とも……」
今にも取っ組み合いの喧嘩をしそうな2人にアイリはオロオロとしている。

「……もし、俺が2ランク以上上がったら今度奢れよ」
「……え？」
「だから……俺が処罰免除出来たら何か奢れ！」

アイリは驚いたようにシルフィードを見る。セレーナも目を見開いてシルフィードを見ている。

「……何だよ」

シルフィードは顔をしかめ2人を見る。

「……いったいどういう風の吹き回し？」
「気まぐれだ。文句あるのか？」
「……ありがとう。マグナス君」
「礼を言われるようなことはしてない。……それなりに高価なモノを奢ってもらうからな」

シルフィードは2人から離れ2階に上がる。

「……マグナス君」
「……なにを奢るの？」
「え？　……マグナス君ってどんなモノなら喜ぶかな」
「いっそのこと自分にリボンつけて私をあげますみたいなこと言えば？」
「な、何で？　……でも何で協力する気になったんだろう」

「自分が処罰受けるのが嫌なんじゃない」
「ははは……でも、嬉しいな」
若干顔を赤くしているアイリを見て、セレーナは深くため息をついた。

第４話（前書き）

最近、ＲＰＧツクールの作品にはまっています。昨日も一日中……。

パソコンで小説書こうとしても、ついついゲームを……。まあ、それでアイデアが浮かぶこともあるんですがね。

結局、携帯が使い慣れてるので携帯で書く訳なんですよ。

第4話

――学院内図書館2階――

シルフィードは机の上に様々な本を広げたまま寝ていた。ノートもあるが、開かれているページには何も書かれていない。偶然、図書館に来ていたアイリとセレーナは爆睡しているシルフィードを見て唖然としていた。

「ねえ、見てこのノート……」
「真っ白だね」
「消しゴムも全く汚れてない」
「勉強してないよね」
「あはは、そうだね……起こした方が良いかな？」
「……当たり前じゃない。叩き起こそう」

アイリとセレーナがシルフィードの背後からゆっくりと近づく。

「あれ？　たしかシグニットさんだよな」
「！」

驚いた2人が振り向くとリサーバがいた。

「何だ、リサーバか……おどろかさないでよ」
「……別にセレーナには言ってない。というかセレーナ居たのか」

リサーバとセレーナは同じクラスだ。それも奇跡的に初等部の頃から毎年。セレーナは親しげに接しようとするがリサーバは嫌そう

な表情をする。

「リサーバは何で図書館に？」

「ソイツの付き添いだ」

リサーバはまだ眠っているシルフィードを指す。

「へえ、２人は知り合いなの？」

「ああ……シルにようがあるなら起こそうか？」

リサーバはセレーナから視線を逸らしアイリを見る。

「たいした用事じゃないから大丈夫」

アイリが答えようとしたが、さきにセレーナが答えた。

「……なら良いけど」

リサーバはシルフィードの隣に座る。

「そうだ、今度の夏休みはどうするの？」

「家に帰るけど……それがなにか？」

「気になっただけ」

「……そうか」

リサーバは小さく舌打ちをしたあと、手にしている本を開いて読み始めた。

「何読んでるの？」

セレーナはリサーバが読んでいる本を見ようと覗き込む。リサー

バは鬱陶しそうにしているがセレーナは気づかない。

「『世界伝説』だ」
「なにそれ？」
「名前通り世界のあらゆる伝説を集めた本だ」
「へえ……どんな伝説があるの？」
「いろいろだよ。読みたかったら読めよ」
「ならちょっとだけ」

セレーナはページをパラパラとめくる。『人間は悪魔と天使の子孫説』『世界滅亡説』『世界破滅を阻止した英雄伝説』『天神と魔神』『光・闇・無』などなど……様々な話が載っている。

「……なんだか、胡散臭そうな話ばかり」
「そうか？　英雄達の伝説は数多く語り継がれている」
「たしかに、そうだけど……。英雄達の仲間……天使の力を持つ天人、悪魔の力を持つ魔人。そんな人が居るって話は聞いたことあるけど、天使と悪魔って居るの？」
「居ると思うぞ」
「リサーバが言うなら居るのかな」

リサーバとセレーナが話している後ろでアイリはどうしようかとウロウロしている。シルフィードに話しかけたいが寝ている。起こそうかと考えるがもしかしたら怒鳴られるかも……。

アイリはしばらく考えていたが、意を決して起こすことにした。
「ね、ねえ……マグナス君」

声をかけながら肩を揺する。するとシルフィードは起きた。

「ん……貴様か。何か用でもあるのか？」
「う、うん。ちゃんと勉強してるかな、って」

アイリは不安そうにシルフィードと、机の上のノートを見る。

「あ〝？　俺が言ったこと信じられねえのかよ」
「ご、ごめんなさい」
「とにかく、お前は何も心配しなくていい」
「わ、わかった」
「あと、絶対奢れよ！」
「う、うん……マグナス君は夏休み家に帰るの？」
「なんで貴様に教えないといけないんだ？」
「ごめん……少し気になって」
「ふん、寮に残るが何か問題でも？」
「い、いや、何も。えっと……私も残るんだ」
「だから何だ？」
「うん、だから……その……夏休み一緒に宿題しない？」
「……は！　嫌に決まってるんだろ」
「だ、だよね」

泣きそうになるがアイリは堪え、セレーナを見る。いつの間にかセレーナはリサーバの隣に座っていた。

「リサーバには将来の夢あるの？」
「そうだな……この本に載っている神話、伝説の真偽を解明したい」
「へえ、そうなんだ」
「ああ、だからそのうちリトリッジに行くつもりだ」
そっか、と言ってセレーナは再び話しかける。。話しかけるセレーナにリサーバは面倒臭そうに答える。だが、声だけ聞けば楽しそうに話しているように聞こえる。

「そうだ、ランク分け試験来週だけど調子はどうかな？」
「ん……まあまあだ」
「そう……わ、私はたぶんランクは変わらないかな」
「まあ、なかなか上がらないからな」

リサーバの視線は本とセレーナを交互に移動している。

「ね、ねえ……」
「さて、そろそろ昼食だ。行こうかリサーバ」
「もう、そんな時間か。……シル、勉強してないだろ」
「気にするな。……それじゃ、お先に」

シルフィードとリサーバは席を立ち、図書館を出た。

「リサーバって格好いいよね」
「そう……だね」
「今日いっぱい話しちゃった」

アイリは、はしゃぐセレーナを見て若干呆れていた。自分のシルフィードとの会話を思い出してアイリはため息をつく。

――食堂――

「アイツってうるさいよな」
「アイツ？……セレーナか」

シルフィードとリサーバは食堂で昼食を食べていた。

「そうだ……アイツ嫌いだな」

「どうしてだ？」
「俺が好きなタイプは物静かな人だな。……お前は？」
「俺か？　そうだな……あまり興味ないな」
「お前な、もう少し女子に興味を持てよ。校則違反をしてまで魔法を使って女子の下着を見るヤツもいるんだぜ」
「それは変態だろ」

そうだな、とシルフィードとリサーバは顔を見合わせ笑ってた。

「……来週のランク試験は本気を出すのか？」
「本気は面倒だから手を抜くつもりだ」
「それで2ランク上がる自信があるのか」
「最近は魔法を使ってないからよくわからない」
「実技の授業もサボってるらしいな」
「だって面倒臭いからね」

お前らしいな、と言ってリサーバは立ち上がった。

「午後も勉強するのか？」
「いや、午後は姉貴様の買い物についていかないといけない」
「ああ、ウィンか……ご愁傷様だな」
ウィンディーネ・マグナス。シルフィードの姉で皆からはウィンと呼ばれている。ランクはBで中等部1年だ。同じ年だが誕生日はウィンが早い。

「何がご愁傷様なのかなリサーバ君」

ギクッとしたリサーバがゆっくり振り向くとウィンディーネがいた。ウィンディーネは笑顔で、だが目は笑っていない状態でリサーバを見ている。

「う、ウィン！」
「久しぶり～。そうだ、リサーバ君もついてこない？」
「え、遠慮するよ」

じゃあな、と言ってリサーバは逃げるように去っていった。

「相変わらずだね……行こうか、シル」
「へいへい姉貴様」
「うん、その言い方ムカつくね」

――クロリア・洋服屋――

シルフィードとウィンディーネは街で有名な洋服屋に来ていた。

「ねえ、これ似合うかな？　あ、これも良いなぁ」
「……はぁ」

ウィンディーネは自分が気に入った服を見つけてはシルフィードに似合うかどうか聞いてくる。

「ため息ばかりついてちゃ幸せが逃げちゃうよ」
「思うんだけがな、俺よりも彼氏に頼んだ方が良くないか？」
「ふふ、シルくぅん！　私に彼氏が出来ないのを知って言ってるのかな？」
「まあ、性格がアレだからな」
「うん、シルを殴りたい」

ウィンディーネに彼氏がいたことはない。頭も良く、容姿もかなり良い。シルが言うほど性格も悪くない。なら何故彼氏が出来ない

のか？
　本人は彼氏が欲しいと言ってるが、ウィンディーネが告白すれば高確率で成功するだろう。だが、ウィンディーネは自分から告白したことはない。告白されそうになったら無理やり話を逸らそうとする。

「実際は……作ろうとしないだけだろ」
「そう思う？　でもシルも彼女いないじゃん」
「まったく興味ないから」
「まだ中1なのに悲しいこと言うね」
「姉貴も中1だろ」
「むぅ。……そうだ、なら私達付き合わない？」
「何言ってるんだよ、姉弟だろ」
「でも血は繋がっていないなら大丈ブイ」
「……つくづくホントか冗談かわからんな」

シルフィードとウィンディーネに血の繋がりはない。シルフィードの父とウィンディーネの母が再婚して姉弟となった。
　シルフィードの母はシルフィードが小さい頃に病気でなくなった。ウィンディーネの父は魔術協会に勤めていたが、魔獣討伐の時に魔獣に殺された。

　ちなみに、魔獣とはモンスターとも呼ばれ、人間以外の魔力を持つ生物のうち人間に害をなすものを言う。

シルフィードの父とウィンディーネの父は小さい頃からの付き合いで2人とも魔術協会に勤めていた。
　ウィンディーネの死後、シルフィードの父とウィンディーネの母は話を重ねるたびに互いに惹かれ合っていったらしい。

「結構本気なんだけどね」

「……ふ、俺は姉貴を姉弟としてしか見てない」

「……そう、なんだ」

「ああ、それに姉貴と付き合ったら苦労しそうだからな」

「むぅ、ひどいなぁ」

「実際弟である俺が苦労してるから事実だ。あいにく俺は駄目だが頑張れよ」

「……既成事実を作れば」

「やめなさい」

第5話（前書き）

冬休みも、あと2日ですね……。

第5話

一学期の終業式前日、クラス分け試験の日を迎えた。試験内容は筆記と実技。

筆記は魔法知識、一般常識などがあり、魔法以外にも数学やら様々な問題がある。

実技は魔力の大きさを測ったり、魔法の技術を測ったりする。他にも体力も計測する。

試験会場は学院内。学生ではない者も最寄りの学院で試験を受ける。

――試験会場――

シルフィードは筆記を終え、実技に入っていた。実技も残すのは魔法技術だけだ。

「シルフィード・マグナス。使用魔法系統を言い的に向かって魔法を放ちなさい」

的（ターゲット）は大きさが異なる10個あり、魔法使用10回以内でどれだけ当てられるかの試験だ。これは、魔法の制御や威力を計る。

「……使うは黒魔術、系統は炎」

シルフィードはまず一発放った。

シルフィードが放った魔法は……全ての的を中心で射抜いた。

「……は？」

シルフィードの魔法は１つの火の玉だったが、途中でいくつもの矢に分かれそれぞれが的の中心を射抜く。

呆気にとられた試験官はしばらく呆然としていたが、ハッとしたように実技の終了を告げた。

――食堂――

「えっと……試験どうだった？」

シルフィードがいつもの場所に座った瞬間、アイリがやってきた。

「さあな、たぶん……ランク変わんねえだろうな」

「え……。そう……」

アイリ自身ランクは上がってないと感じていてシルフィードが最後の希望だったが、ランクは変わらないだろうと言われアイリは顔を青くさせた。

「……そもそもお前が２ランク上がれば大丈夫なんだがな」

「それが出来れば苦労しないよ……」

アイリは今にも泣き出しそうな顔をしている。

「……ヤケに親しそうに話してるね。もしかして付き合ってる？」

「ウィン、どこが親しそうに見えるの？」

アイリが振り向くとウィンディーネがいた。アイリとウィンディーネは同じ部屋だ。仲が良く、セレーナも含めよくつるんでいる。

「あれ？　セレーナは居ないの」
「セレーナはリサーバ君のとこだよ」
「へえ、それぞれ好きな人のもとへ行ったのね」
「ち、ちょっと……違うからね。ウィンディーネは行かないの？」
「来てるじゃない。私が好きなのはシルだよ」
「え……。そっか、血は繋がってないんだよね」
「うん。負けないよ」
「え、えぇ！　なんでそうなるの？」

ライバル宣言をするウィンディーネに顔を赤くしながらアイリは驚いたように叫ぶ。さらに叫んだことで周りの視線を集めた。そのことでさらに顔を赤くする。

「なんでって……シルのこと嫌い？」
「好きでもないし嫌いでもないよ」
「はっきりしてよ。まあ、いいやシル今からデートを……って、シル！」

ウィンディーネが振り向いた時にはシルフィードは既に食堂から居なかった。

――図書館――

「ジッケンハセイコウシタカ？」

ルーは2階で読書しているディザを見つけ話しかけた。

「失敗だ。……肉体的にも精神的にも脆すぎた。せめて、Bランクだな」

ディザはつまらなそうに言った。

「シッパイシタヤツハドウスルンダ？」

「処理、もしくは再利用する……」

「サイリヨウ？」

「あくまでも可能性だがな。生物の魔力は死後少しずつ肉体から抜け出していく。ならば、死後間もない生物の魔力を個体として残せれば利用出来ると思ってな……その実験はまだなんだが……」

「ダガ、シッパイシタト……」

「失敗したが、かろうじて生きている」

「ソウカ……ソウイエバ、ランクワケシケンハドウダッタ？」

「変わらないね。それに、ランク分け試験よりも実験が優先順位が高い」

さて、と言ってディザは立ち上がる。ディザはルーを見て笑みを浮かべる。

「ランク分け試験の結果は明日の朝、学院内の掲示板に表示される。そこから高いランクのヤツを探す」

「ヘエ、アラタナジッケンダイヲサガスンダナ……ナカマサガシハオワッタノカ？」

「仲間？　……ああ、駒のことか。今作っている最中じゃないか」

ディザが何を言ってるのかイマイチ理解出来ないルーは首を傾げる。

「実験の成功体が駒となるんだ」

ディザが行う実験は、人間の体を器として別の魂を入れ込むモノだ。

入れ込む魂は人間ではなく、悪魔だ。悪魔は強い者であれば人間

と同じ見た目になることが出来る。だが、全体的に言うと出来ない悪魔が多い。

弱い悪魔と言えども人間で言えばBランクを超える。器が脆いと魂が入り込めず器は精神的に崩壊する。入り込めたとしても肉体が魂の動きについていけないと器は崩れる。

成功した場合は人間の姿と悪魔の姿を使い分けることが出来、部分的に変化させることも出来る。

器になった者の魂は悪魔の魂によって消え去ることが多いが、器の魂が悪魔の魂よりも強ければ悪魔の魂は消え去る。悪魔の魂が消え去っても悪魔の姿になることが出来る。

場合によっては両者の魂が消え去り、新たな魂が入ることもある。それとは逆に、両者とも消えず1つの器に2つの魂が入ることもある。

「ナルホド……」

「まだ早いが今日は寝る……じゃあな」

――男子寮前――

ここにはセレーナとリサーバがいた。

「……いつまでついてくるんだ？」

「あ……ちょっと、話があるんだ」

「何？」

俺は早く部屋に行きたいんだが、とリサーバは小さく呟いた。

「私、リサーバのことが好き！　つきあってください」

「……えぇ？」

いきなり告白され、目を見開いて口をパクパクさせるリサーバ。顔が真っ赤なセレーナはリサーバを真っ直ぐ見つめている。

「ち、ちょっと待て……お前、俺が好きなのか？」

「うん。……返事は遅くても良いから、待ってるね」

呆然とするリサーバを背にセレーナは女子寮へと帰って行く。

――次の日――

全校生徒が掲示板の前に来ていた。掲示板は敷地内に多数存在するが、どの掲示板の前にもたくさんの生徒がいる。

「やりすぎたぁぁっ！」

自分のランクを見てシルフィードは頭を抱えて叫んだ。叫んだことで周りの注目を集める。シルフィードの視線の先にはこう書かれていた。

『中等部一年シルフィード・マグナス……Sランク』

それを見た他の生徒は驚いたようにシルフィードを見つめている。

「へ……平穏な学生生活が……」

第6話（前書き）

今回は会話文多め……いつも、かな？

第6話

Sランク……魔術協会によって定められた魔術師ランクの最高位。

終業式が終わった後、シルフィードとアイリは学院長室に呼び出されていた。

「約束通り、処罰は免除だ。しかし、Sランクになるとはね」

「……もう一回受けさせてくれ」

「良い結果の方をランクとするから意味ないよ。Sランクになったということで王宮に来るようにと連絡があった」

Sランクになった魔術師は国王に会わなければならない。基本的にその場で魔術騎士団と呼ばれる王宮警備隊のようなモノにスカウトされる。

「かぁぁっ！　……夏休みなのに」

「規則だからな、学院内ではなく国内規則」

シルフィードはため息をついた後学院長室を出て行った。アイリはその後ろをついて行く。

「凄いよ、マグナス君。いきなりSランク！」

「……ったく、厄介なことになった」

「……？」

「せめてBランクと思っていたが久しぶりに使ったから力を出しすぎた」

「ランクは高い方が良いと思うけど」

アイリはそう言い、不思議そうに首を傾げた。

「目立ちたくないんだよ」

「Gランクの時点でかなり目立ってたよ」

ツッコミを入れるアイリに「違うんだ」と言ってシルフィードは頭を抱え込んだ。

「Gランクなら国では目立たない。でもSランクなら国内だけじゃなく世界中に注目される」

Gランクは珍しいことではない。ランク分け試験をサボればすぐになれる。だが、Sランクは本気を出してもなることは難しい。

知識や技術など努力で補う点に加え、素質も必要だ。だからSランクは国内だけではなく世界中で貴重だ。

「でも、凄いよ」

「気軽で良いよな……もともと貴様のせいで……」

「ご、ごめん……。えっと、何を奢れば良いの？」

「そうだな……対魔コート。メーカーはエールだ」

対魔コートとは魔法を反射するコートだ。メーカーによって性能は異なり一流メーカーであるエールの製品は、ほぼ全ての魔法を完全に反射する。その分値段も高い。

「え、エール……対魔コートってもともと高いのに、エールのコートなんて……」

「……約束だったろ？」

「む、無理だよ。……マグナス君はSランクだから安くなるけど私は……」

「……っち、わかった。わかったよ。何も奢らなくていい。だが、金輪際俺に話しかけるな……目障りだ」
「……うん、わかった」
「ふん、じゃあな。……ったく、面倒だな。王宮が近くってのが救いだな」

魔術学院は世界中にあり、クロリア国内にも多数存在する。王宮からかなり離れたところに存在する学院もあり、そこにいたら何日かけて王宮に行くのだろうかとシルフィードは思った。
――クロリア王国図書館――

「ナア、オレガオモウニSランクヲジッケンダイニスレバイインジャナイカ」
「Sランクは無理だ。王宮からの呼び出しもたまにあるだろうし、Sランクがいなくなれば大騒ぎだ」
「……ナラ、Bランクノウィンディーネトカイウヤツカ？」
「ああ、幸いなことにウィンディーネは夏休みも学院に残るそうだ」

ディザはウィンディーネと同じクラスの男子に聞いてもらい情報を得た。

「デモウィンディーネトSランクノシルフィード、ドチラモマグナスダトイウコトハキョウダイナンダロ？」
「そうだ、　シルフィードが王宮に行ってる間に実行する」
ディザは薄気味悪い笑みを浮かべていた。

――男子寮――

シルフィードは王宮へ行く準備をしていた。フィルは終業式が終わった後すぐに荷物を持って家に帰った。なので、夏休みの間は1

人でこの部屋を使えるはずだったが王宮に呼び出され、さらには数日間は王宮に泊まることになった。

王宮には教師も一緒で、ノウフォン・ミケロッドという女教師……いつもシルフィードがババアと呼んでいるがまだ２３で美人だ。

「……で、なぜお前がここに」

シルフィードは自分のベッドの上で寝転がっているキースにたずねる。

「暇だから……明日からお前は王宮、俺はリトリッジに旅行。しばらく会えないからいいじゃん」

「旅行？　リトリッジって言えば文化財巡りか……お前歴史に興味があったか？」

そんなわけないじゃん、とキースは笑う。

「俺が興味あんのは昔そこで研究されてた魔法だ」

「……たしか召喚術の類だったな」

召喚術にも様々なものがあり、遠くの物（人）を近くに呼び出したり、魔獣を呼び出したりするものがある。禁止されているものとしては悪魔や天使などの召喚がある。

「昔は召喚した悪魔を人間と一体化する研究がされていたらしい」

「それは悪魔が人間の体を乗っ取るのとは違うのか？」

悪魔は人間の体に憑依することが出来る。その時の人間の魂は気

を失っている状態だという。
「体だけじゃなく魂も一体化させるんだ」
「へえ……ならば強い魂が残るわけか」
「そうだ。だが例外もあるらしいが」
「……そもそも成功してるのか、その研究は？」
「その資料がないんだな、これまた」

かなり前の研究なので資料が紛失してもおかしくはないが誰かが故意に紛失させた可能性もある。もしくは盗まれた可能性もある、とキースは考えているようだ。

「リトリッジに行って研究に関する情報を手に入れられるといいな」

そうだな、と行ってキースはシルフィードの部屋を出て行った。しばらくすると、今度はリーチとリサーバが部屋に入ってきた。

「なあ、リサーバの悩みを聞いてくれ」
「……どうしたんだ？」
「いや、この間セレーナに告白されてさ……それまで嫌いだったのに、最近何だか妙に意識しちゃって」
「付き合えばいい」

顔を赤くして言うリサーバにシルフィードは冷たく言い放つ。リーチはシルフィードの隣で頷いている。

「だろ？　俺もそう言ったんだが……」
「俺は……俺のタイプはセレーナみたいなタイプじゃないはず、なのに、なのに……この気持ちは何なんだぁ！」
「リーチ、リサーバを連れて部屋から出てってくれ！」
「了解」

「は、放せ兄さん！　俺は、俺はぁ！」

バタン。

リーチはリサーバを引きずって部屋を出て行った。だが、シルフィードの部屋にいてもしばらくの間リサーバの叫び声が聞こえていた。

「……もう、誰も来ないよな」

頭を抱えてベッドに倒れ込むシルフィードだが、すぐにノックの音が聞こえる。

「今度は誰だ……」

シルフィードはゆっくりと扉に向かって歩いていく。シルフィードが扉を開くとアイリがいた。

「あ……こんばんは」
「……また、約束を破る気か？」
「ご、ごめん……だけど、お礼を言いたくて」
「……もとはといえばお前の」
「うん、そうだね……ごめん」
「……ふん」
「……ありがとう、マグナス君」
「……お前、それだけを言いに？」
「あ、あの……」
「何だよ……」
「や、約束のことなんだけど……遅くても中等部までにバイトとかしてお金貯めて、コート買います。だ、だから……」
「……だから？」

「こ、これからも話しかけても良いですか？」

アイリは涙目でシルフィードを見つめる。シルフィードは、嫌そうな顔をしてため息をつく。

「……なあ。俺さ、お前のこと嫌いだ」

「……ッ」

「本当なら顔も見たくない。だが、それは無理だ。だから、話しかけるなって言ったんだ」

「……わ、私は……マグナス君が好きです」

「は？　俺を？　何で？」

「何故だかわからない……だけど、初等部の頃からマグナス君を見てるとドキドキして……」

「……で、何？」

「どうすれば、マグナス君に自分を見てもらえるか考えた。……いつも授業は寝てばかり、ランクもいつも最低。だから、私が勉強してマグナス君に勉強を教えたら少しは……って考えたんだ」

「勉強嫌いなヤツに勉強教えても嫌がるだけだろ。それに、俺はお前みたいな馬鹿に教わることは何もない」

アイリはうつむき、涙を流している。シルフィードはそれを迷惑そうに見ている。

「そ、そうだよね……。私、マグナス君よりランクも低いから。だ、だけど……私は、マグナス君が……」

「お前さ……いい加減にしてくれないかな？　何？　お前何なの？」

「つきあってくれとは言わない。好きに成ってくれなくても良い。わ、私は……マグナス君と話がしたいの……友達になりたいの……」

バンッ！

シルフィードが壁を叩き、アイリはビクッと肩を震わせる。

「あのさ、わからない？　俺、アンタが嫌い。言ったよね？　俺は付き合いたくないし友達にもなりたくない。本当は顔も見たくない……何度でも言うよ、お前が嫌いだ」

「……なら、パシリ……奴隷で良いから……近くに居たい、話したい」

「……何でそこまで」

「……初等部の頃、ちょっとしたことで先輩達から因縁つけられて、他の人から気づかれないように虐められてた。まだ初等部なのにさ、結構悪質なものがあってね、ツラかった。でも、みんなに知られたくない、死にたいとまで思った」

「……」

「それを助けてくれたのがマグナス君だった。……マグナス君も先輩達から因縁をつけられていたよね。でも、マグナス君は先輩達を恐れず……逆に叩きのめした」

「……ただ先輩が気に入らなかっただけだ」

初等部の時、先輩達を叩きのめしシルフィードはその先輩達から恐れられるようになった。偶然シルフィードと同じクラスだったアイリがシルフィードに注意しているところを見た先輩はアイリに対してのイジメや暴力……他の生徒に対しても止めた。

「間接的にだけどマグナス君は私を助けてくれたんだ。……私、好きな人のパシリ、奴隷なら喜んでなるよ。だから……」

「……わかった。お前は俺の奴隷だ」

「あ、ありがとう」

「……とにかく、今日は部屋に戻れ」

「うん、わかりました」

アイリは笑顔で部屋を出て行った。

「……さて、寝るか」

ベッドに向かおうとするが、再びノックの音がした。シルフィードはため息をついて扉を開けた。

「ヤッホー、シル。ウィンだよぉ」

……バタン。

シルフィードはウィンディーネと目があった瞬間扉を閉めた。

ドンッ、ドンドンッ。

「開けろ〜」

ウィンディーネは扉を叩き壊すような勢いでノックをする。しばらくシルフィードは無視をしていたがノックが止まることはなく、いやいやながら扉を開けた。

「ヤッホー、いきなり閉めるなんてヒドいよ」

「さっきから次々に入ってこられて最後に姉貴かよ……気が滅入るな」

「本当にヒドいよ」

ウィンディーネは頬を膨らませる。

「で、何？」

「明日王宮に行くんでしょ。……その前に話したいことがあって」
「……何だよ？」
真剣な表情になるウィンディーネをみて、シルフィードは顔を引き締める。

「朝から誰かに見られている気がする」
「……ストーカーか？」
「そんなんじゃない。はっきり言えないんだけど人のようで人ではない気配がするんだ」
「何だよそれ」
「わからない。でも、確実に誰かが見てる……今は気配はしないけど」

ウィンディーネは室内にいる時はあまり気配を感じないが、窓の近くや外に出ると誰かに見られている気がするという。

「……気をつけろよ」
「心配してくれてるんだ」
「そりゃあ、姉貴だしな」
「そこは大切な女だからとか言って欲しいな」
「……大切だとは思わないがな」
「ヒドいな。……それじゃ、お休み。なるべく早く帰ってきてね」
「……わかった」

ウィンディーネが部屋を出てからもシルフィードは扉をじっと見ていた。

「……姉貴」

第7話（前書き）

特に変化はなし……たぶん。

第7話

――クロリア王国クロリア王宮――

シルフィードは王宮の前に来ていた。王宮は首都クロリアの中心に位置している。王宮内部は一般人立ち入り禁止だ。

立ち入りが許されているのは呼び出しを受けた者、許可をもらった者、魔術協会幹部、魔術騎士団などだ。

「ミスター・マグナス、くれぐれも失礼のないように」

「わかってるって、ミケロッド先生」

2人は魔術騎士団の兵士に案内され部屋に連れて行かれた。

「全員が到着するまでの数日間、2人にはこちらの部屋で過ごして頂きます」

王宮敷地内にある客人用の建物には二人部屋が多数あり、食堂や浴場もある。二人部屋のひとつに通された2人は部屋を見回す。

「……凄い」

部屋を見てノウフォンが呟いた。部屋はそれなりに広く、どの家具も高価なものだろう。寮とは大違いだな、とシルフィードは思った。

「お食事の時間になりましたら呼びに来ますのでそれまでゆっくりしていてください」

兵士はそう言って部屋を出て行った。

「全員って何人来るんだ？」

シルフィードはノウフォンにたずねる。

「全員で7人来ます。1番若くてアナタと同じ年齢。今回は全員学生なので最高22歳までです」

初めてSランクに上がった者は長期休業期間中に王宮に行かなければならない。学生、社会人に関わらず呼び出しはかかる。学生の場合は教師がついて行くことになる。

「……はしゃぐのは良いが、呼び出されたのは俺だから、あまり騒ぐなよ」

「……はい」

ノウフォンは教師だが、まだ若く王宮に来たことも初めてで、この部屋ほど豪華なホテルにも泊まったこともない。はしゃぐのも当然だ。

ノウフォンは顔を真っ赤にして俯いた。

「……ミスター・マグナス、聞きたいことがあります」

「俺にミスターをつけたのは久しぶりだよな……何を聞きたいんだ？」

「今までGランクでいたのは何故ですか？」

「Gランクだと期待すらされないから気楽にやれる」

「そうですか……その、落ちこぼれと言ってすみません」

「気にするな。それよりさっきからどうした？」

「いえ……私としたことがランクだけで生徒を見ていました。これ

からは気をつけます」
「は、はあ……頑張れ」
ほとんどがランクで見ると思うが、とシルフィードは言いたいがここはノウフォンを応援することにした。
――マジックゲート敷地内図書館――
「えっと、ここはこうして……」
「あ、そうか……」
ウィンディーネとアイリは図書館の2階で夏期休業中の宿題をしていた。
「もう着いた頃かな？」
「近いからすぐに着くよ」
「わかってるけど……あ、セレーナ」
アイリがふと階段の方をみると顔が赤いセレーナを見つけた。セレーナはアイリに近づいてくる。
「あ、アイリ……思いっきり私を殴って」
「な、何言ってるの！」
「わ、私ね。リサーバからOKもらったの」
「何が？」
「告白……付き合ってくれるって」
「ほ、本当！　良かったね……リサーバ君は？」
「さっきリーチと一緒に家に帰ったよ」
その時に付き合ってくれるって言ってくれたんだぁ、とセレーナ

は満面の笑みで言う。
「……本当に殴っていい？」
ウィンディーネは笑顔でアイリにたずねる。
「が、我慢してくれると嬉しいな」
「そっか……ちょっと部屋に戻るね。夕食には来るから食堂の席取っててね」
「わかった」
ウィンディーネは図書館を出て、女子寮に向かおうとするが視線を感じて振り向いた。
「……やあ」
「フレイル先輩」
ウィンディーネが感じた視線の正体はディザだった。
「ちょっといいかな？」
「……何ですか？」
「……初めて君を見たときから……何だい？」
ウィンディーネが睨んでいることに気づいたディザは言葉を止める。
「先輩が、昨日からずっと私を見ていたんですか？」
「？　一体何のことだ」
ウィンディーネはランク分け試験の翌朝から視線を感じるという

ことをディザに伝えた。

「いや、僕は知らないよ？」

「なら、一体誰が……」

ディザは、もしかしたらルーか？　と思うが口には出さない。

「僕が犯人を探すよ」

「気持ちは嬉しいです。だけど、まだ先輩のことを信じたわけではないので遠慮します」

そう言ってウィンディーネはディザに背を向けて歩き出した。

「ハハハ、ザンネンダッタナ、ディザ」

「……犯人はお前だろ？」

「ソウダ。デ、ドウスル？　ケイカクハシッパイダナ」

「いや、違う。いざとなったら無理やりにでも……まだ手はある」

アイツは手に入れる。ディザはウィンディーネが去った方をただジッと見つめていた。

「……どうやって学院内に入ったんだ？」

「キギョウヒミツダ」

――クロリア王国クロリア王宮魔術騎士団訓練所――

王宮内に存在する魔術騎士団の訓練所、そこで2人の兵士が剣術の練習をしていた。この世界は魔法がよく使われるが、武術も勿論使われる。

武術は剣術や柔術、槍術など、様々な種類が存在する。

武術は魔法学院でも学ぶが道場も存在する。訓練所で使う武器はすべて訓練用の武器であり、殺傷能力はほとんどない。

「騎士長、ありがとうございました」

1人の兵士グレイ・グレファスは騎士長と呼んだ兵士に礼を言う。魔術騎士団は数チームに分かれていて、それぞれに隊長と副隊長がいる。隊長がチームのトップだということに大して、騎士団のトップは騎士長と呼ばれる。

ちなみにグレイは隊長だ。隊長は日替わりで騎士長に訓練を見てもらえる。

「そういえば今騎士長の息子さんが王宮内にいるようですよ」

「シルが？」　騎士長の名前はグノムス・マグナス、シルフィードとウィンディーネの父親だ。Sランクにして騎士長である彼はクロリア最強の魔術師と呼ばれている。

だが、それはあくまでも王宮内だけでの話だ。なぜなら魔術騎士団のメンバーは一般人には知らされることはないからだ。

グノムスがSランクであることを知っている人は居ても騎士長であることを知っているのはほんのわずかだ。

「Sランクになったみたいですよ」

「何、アイツが……目立ちたくないと言っていたのにSランクになるとはな」

グノムスが腕を組みながら呟く。グレイはそれを見て微笑んだ。

「騎士長はお子さんの話になると楽しそうですね」

「まあな、親バカと言われることもある」

グノムスは笑いながら着替えるために宿舎に向かう。グレイはそうですね、と言ってグノムスを追いかけた。

――王宮内客人用食堂――

シルフィードとノウフォンは兵士から食堂に案内された。食堂も大きく、学院とは大違いだ。ノウフォンが目を輝かせているのを苦笑いしながらシルフィードも周りを見回す。

既に4人が席に座って料理を待っていた。どうやら今日来たのはシルフィード達を含め6人のようだ。

席は既に決められていて、シルフィードの席の隣は同い年であろう少女だった。シルフィードが席に座ると少女が話しかけてきた。

「はじめまして、エミリー・シュバルツといいます。ランクは……わかりますよね。サンライト学院の中等部1年です。よろしくお願いします」

「俺はシルフィード・マグナス、マジックゲートの1年だ。気軽にシルと呼んでくれ。よろしく」

サンライト学院。首都クロリアから東に向かい森を抜けるとヴァニアスという街があり、その街にサンライト学院は建っている。

「同い年なんですね。そこにいるアリサ・ヘストルは高等部1年だそうです」

シルフィードがエミリーの視線をたどるとアリサという少女がいた。まだ女子しか来てないのか……、とシルフィードは居心地が悪そうに周りを見る。

食堂の扉が開き、2人の男性が入ってきた。その内の1人をシルフィードよく知っていた。

「ええ皆さん、王宮へようこそ。私は魔術協会に勤めているバアル・ゼブルです」

「俺はグノムス・マグナス、数年前から魔術騎士団騎士長をやっている」

グノムスの言葉に周りはざわめく……といっても6人しかおらず、1人は平静を保っている。どの国にも魔術騎士団は存在する。その中でもクロリア魔術騎士団はトップクラスの実力を持ち、騎士団のトップである騎士長は最強の魔術師だ。

そんな凄い人に会えたことに5人は驚いていた。エミリーとノウフォンは、ふとあることに気づいてシルフィードを見る。

「マグナスって……もしかしてシル君のお父さん？」

「……ああ、そうなるな」

2人が、信じられないという様子でシルフィードを見ているとグノムスがシルフィードに近づいてきた。

「久しぶりだな、馬鹿息子。元気にしてたか？」

「勿論だ。クソオヤジこそ元気だったか？」

「当たり前だ。俺を誰だと思っている。……話したいことは山ほどあるが、また今度な」

さて、と言ってグノムスは周りを見渡す。

「今回のランク分け試験では、なんと7人、しかも学生がSランクになった。これは異例なことだ」

毎年、新たにSランクが1人出れば良い方だ。ほとんどの場合Sランクになった者は王宮に泊まるのは1日だけだ。
全員が揃ってから国王に会うのだが、7人もいて学院がバラバラだ。揃うまで時間がかかるので長ければ1週間王宮に泊まる可能性もある。

この世界の交通手段は基本的に徒歩だ。手名付けた魔獣に乗ったり、魔獣が引く馬車ならぬ魔獣車があるが魔獣だということで不安に思う者が多く、滅多に使われない。

「魔術騎士団に入ればいつでも王宮に入れるが、学生は基本的には騎士団に入れない。卒業後、スカウトが来るだろうがまあ、興味があるヤツは考えてくれ。王宮で過ごす数日間、是非とも楽しんでくれよ」

グノムスが言い終わると同時に厨房の扉が開き、料理が運ばれてきた。どの料理も高級な食材を使っている。

「……美味しそう」

エミリーは呟く。口には出さないがみんなも同じ気持ちで料理から目を離さない。

「それでは召し上がれ」

シェフがそう言うと待ってましたと言わんばかりに誰もが料理を食べ始めた。

「……みんな凄いな」

シルフィードは周りを見てそう呟いた。ガツガツと食っている者が多かった。それに対してエミリーはゆっくり食べていた。

「食べるの遅いんだな」

「いえ、そうではなくゆっくり味わって食べたいんです。こんなに美味しい物、今度いつ食べれるかわかりませんから」

なるほど、と思ったシルフィードもゆっくり食べていた。

ふと、扉が開き女性が入ってきた。

「マグナス様、ロフォカル様がお呼びしてます」

「ルキフグスが？　わかった、ありがとう」

グノムスは女性に案内されて食堂を出て行った。

――王宮内魔術協会会長室――

魔術協会の本部はこの街にあり、すべての魔術協会を統べる会長の部屋は王宮内にある。会長ルキフグス・ロフォカルに呼び出され、グノムスは会長室に来ていた。

「魔術協会ヴァニアス支部から連絡があった。最近遺跡荒らしが頻発している」

ヴァニアスの北には遺跡があり、まだ発掘調査の途中だ。そこに盗賊がやってきて遺跡で掘り出された物が盗まれたり壊されたりしている。

「そこで、魔術騎士団に救援要請が来た」

魔術騎士団は王宮警備以外にも王国内で起きる様々な事件の調査や討伐依頼を受けることもある。

「盗賊なら支部でも対処出来ると思うが」

「報告によればSランク魔術師が盗賊の中にいるようだ」

魔術協会本部でもSランクは数えるほどしかいない。支部に至ってはAランクが1人いれば良い方だ。

「わかった。今すぐにでも向かう。俺1人でも充分だが、念のためグレイも連れて行く」

「ああ、大丈夫だと思うがくれぐれも油断はしないでくれよ」

わかっている、と言ってグノムスは会長室を出た。

「……我等の計画の為にはグノムス、君には消えてもらう必要がある。悪く思わないでくれよ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1438ba/

魔法学院物語(仮)

2012年1月8日20時49分発行